かく記録紙から読み取るという気の遠くなるような作業を，尊敬に値する根気と確実性をもって遂行して頂き，データの早期解析に大きな力になって頂いた．その他，気象研究所，極地研究所の支援部門の方々の御協力も含め，かくも多くの方々のお力添えの上に今回の仕事が成り立っていることを報告して，御協力頂いた皆様への感謝の言葉としたい．

小田原正夫著

地震災害を免れるには

開発社，1979，A 5版，234頁，980円．

わかり易く，楽しめる本である．小田原正夫の博学ぶりに一番おどろかされた．実は，これは寺田一彦氏が実弟の没後，50年祭の記念にその正夫の名で著わしたもので，M（正夫）とK（一彦）の対話になっている．この本の特色は，素人のM夫が地震に関する話をK先生からエピソードを交えながら聞かされ，いつの間にかいろいろな事を学ぶ点にある．ものを学ぶとき，その背景あるいは裏話を知ればおもしろさが一段と増すものである．K先生の著書にはその背景や裏話が豊富で，評者はいつも感心させられている．

地震の科学，震災の体験，歴史地震，地震予知，防災のことをこのわずか一冊の本から能率よく学ぶことができる．豊富な内容からそのエピソードの一部を紹介しよう．関東大震災の時横浜港に碇泊していた船からの無線を神戸海洋気象台のN無線技師が傍受し，県庁に知らせて始末書を書かされた話，シャボー氏が日本の陸地測量を引き受ける約束をしたが，測量基点が地震で動くといけないと思って「地震計」を初めて日本に持って来たこと，大正12年に旧制一高に入学した「なまず会」の学生によって書かれた震災体験記の紹介の中に，上州における福田前首相のもの，被服廠に逃げて九死に一生を得た人によるものなどが引用されている．なまなましく，感動的である．また朝鮮人事件のことなど．そのほか，モホロビッチ層に穴を掘るモホール計画はカクテルパーティーでの雑談から出たこと，その計画中止のいきさつ，気象学者のウェゲナーが最初に大陸移動説を出したが，当時は総スカンを食ってしまったこと，和達博士が療養生活中に長いこと待っていた巨大な深発地震に遭遇し，この経験がもとで日本の地震学は格段の進歩をしたこと，伊勢湾台風の警報をある市で女子職員が受け取りながらそれを机にしまって伝えなかったので，その市は多数の死者を出した話，等々．

以上のような内容を含むので，だれが読んでもおもしろく，たいへん有益である．本の題名もそれにふさわしい．もし，学校の地学の先生がこの本に書かれていることを授業中に話されれば，それは生きた授業で生徒はますます地学に興味を持つようになるに違いない．

（近藤純正）